

『紡ぐ』

2020.5.15 第4号
発行 教育相談室「あした塾」



(ギリマツジ 桜地内)

深紅の5月

5月。桜の季節が、深紅の季節へ。街のあちこちに、この色があふれています。

新型コロナウイルスから身を守るために

警戒

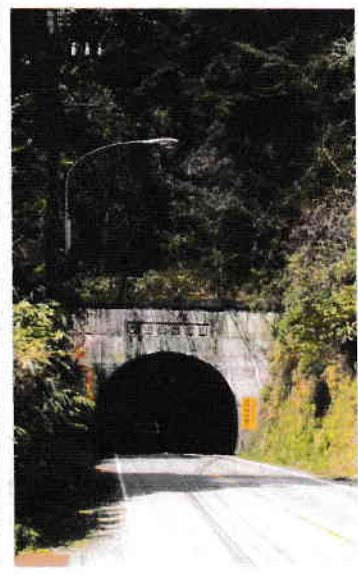
テレビも新聞も「新型コロナウイルス、ニュース一色。梨能登は感染者がいないといふことばかり心配です。自粛はキツイです。できる予防、身を守る努力はしてあげたいですね。そんな中、さゆまの交差点101号の職員の皆さんの取り組みや、同社会福祉協議会の取り組みが報道されています。この状況は、警戒が大切です。

社会福祉協議会の取り組みは、多くの人たちが手作りマスクに取り組み、5月8日現在で800枚以上のマスクが届いています。11団体そして何人もの個人ボランティアの方が頑張ってくれました。

詐欺に注意!

どこかで、国内、県内で多くの詐欺が報じられる中、新型コロナウイルスが多発しています。能登半島地震のときもそのように、困っている人たちに悪質な所業をする残念な人たちがいます。「振込をせよマスクが届かない。」「品物を注文してクレジットカードの番号などを入力したため、現金を引き落とされた。」などです。

皆さん! 気をつけましょう。絶対に「怖い話」はあっても、動く前に、必ず誰かに話してやることです。気をつけましょう!!



ライトをつけましょう

トンネルや薄暮時、強い雨降るときの、車を走らせるときはライトをつけましょう。相手に自分の存在を知らせ、自分を守り、相手を守りましょう。



投稿 梶 室木正武

立山が見えれば雨で綿切りに追われるように
甘藷を植える
高齢のバワイ全開
来いの子に代わり
まっ赤な団種模操る

甚左衛門地藏

この「甚左衛門地藏」の記事は3月まで終了し「おれ寝」だより、第100号(秘29年2月1日発行)に載せられたので、再掲するにとしました。

私たちが、穴水町に住みながら「知らない穴水町」が多くあるように思っています。これ「しんぶん」『紡ぐ』では、穴水町の知らない穴水町を「穴水町」あるいは、見直していけばいいのではなからぬかと思われ「穴水町」を紹介していきます。

「甚左衛門地藏」というお話は町の教育委員会にいた岡本伊佐夫さんがまとめた「おれ寝」百物語」に収録されている民話です。この民話にある「地藏」が実際にあるとのこと。甚左衛門と縁のある東中岩の清琳寺を訪ねました。この寺の住職の語り通り、甚左衛門が寄進したという「灯籠」が2基あります。「安政二年(1855年)十一月願主甚左衛門と刻印されている。」「地藏」の方は、富山と能登郡武連の境付近にあります。予想を超えて大きなお地藏さんでした。「文久三年(1863年)亥十月願主甚左衛門」とあります。



「安政二年(1855年)十一月願主甚左衛門と刻印されている。」「地藏」の方は、富山と能登郡武連の境付近にあります。

民話の世界にとどまっていた「おれ寝」が事実であったことに、何と云う言っても感動と充実感を覚えることができました。(1)

民話集録されている「おれ寝」百物語は、穴水町図書館にあります。



シ、読下さい。

民話「甚左衛門地藏」

昔、穴水の富山村に甚左衛門という男がいました。貧乏な用舎暮らしに飽き飽きした甚左衛門は、京の都へ出稼ぎに行きおれ寝、思わぬおれ寝、ついには近強盗を働く荒んだ生活をしていました。ある日、旅人から懐しの母を奪ったので、それは小さな石地藏でした。石夜、夢の中で富山村の地藏が現れ、母親の子を思っている石地藏にして渡すことを話してくれました。

ハッと目を覚ました甚左衛門は、おれ寝のおれ寝を浮かべた母親の顔の石地藏を見て、心をおれ寝、一生懸命働いたそうです。その後、富山村に帰った甚左衛門は母親の死を知り、都へ蓄積した金で東中岩の清琳寺に灯籠を寄進し、富山村の境に地藏を一体建てお守りしたとのこと。村の人たちは、このお地藏さんを「甚左衛門地藏」と呼び、親しんでいるとのこと。

(岡本伊佐夫編著「おれ寝」百物語、51)